郷土史への扉

シリーズ大隅国を知る ⑨

国指定史跡「大隅正八幡宮境内と社家跡」

大隅国の一宮である鹿児島神宮（大隅正八幡宮）と※1社家の館跡が、「大隅正八幡宮境内及び社家跡」として平成二十五年十月十七日に国指定史跡となりました。霧島市では、大隅国分寺跡、隼人塚、上野原遺跡に続いて4例目の国指定史跡です。

一．大隅正八幡宮とは

大隅正八幡宮は、社伝によると和銅元（七〇八）年の建立で、『延喜式神名帳』には〝鹿児嶋神社〟の名で薩摩、大隅、日向の中で唯一の大社として記載されています。その後、平安時代に宇佐八幡宮が九州各地に別宮を作ったとき、八幡神が※2勧請され、それによって「八幡正宮」と呼ばれるようになったと考えられています。諸国の神社が一宮、惣社を中心として整えられ、大隅国では正八幡宮が一宮として保護されました。

二．大隅正八幡宮の隆盛

鎌倉時代になると、源頼朝の庇護などにより勢力を拡大していきます。建久八（一一九七）年の『建久図田帳』によると、大隅国の約三千町の田のうち正八幡宮領は約千二百九十六町に及んでいます。また、鎌倉時代後期の書物『八幡愚童訓』に書かれている「八幡神の起源は大隅正八幡宮である」という内容を主張したことで権威が上がり、所有している田畑を寄付する人も出てきました。

強大な経済力を元に、正八幡宮の門前には、社家や御家人の居館、寺院などからなる「宮内」と呼ばれる町が形成されました。正国寺や正高寺などの寺が建てられ、多くの神職・僧侶が居住し、その数は百十家もあったといわれています。中でも世襲の桑幡・留守・沢・最勝寺の四社家は、それらを統括する立場にありました。

三．大隅正八幡宮境内

教育委員会では平成六年から大隅正八幡宮に関係する遺跡の発掘調査を実施してきました。境内からは、中国製の青磁・白磁・陶器やタイ産の壺などが出土しています。

正八幡宮の所有品の中には、十四、十五世紀前半の中国やタイの陶磁器が多数あり、古文書には宇佐八幡宮（大分県）や石清水八幡宮（京都府）、京都、鎌倉などのことも書かれており、幅広い交流があったことが分かりました。

四．弥勒院跡（宮内小学校）

弥勒院跡では、多量の中国製陶磁器、タイ産の壺、ベトナム産陶器、土師器などが出土しました。出土品に中国の越州窯青磁や須恵器が一定量含まれていることから、弥勒院が建てられたのは十世紀と思われます。

五．四つの社家

社家跡の特徴としては、館の周辺に土塁と堀（幅四～七メートル、深さ二～四メートル）を巡らせており、その規模は七十～百メートルの方形に区画されています。

社家の筆頭格である桑幡氏は、元は息長姓で「長門本平家物語」に第五十三代息長清道の名が見られます。沢氏の墓所には、四十四基の板碑に加え、延応元（一二三九）年の石塔や五輪塔、嘉禎三（一二三七）年銘の自然石柱のほか、中国から搬入されたと考えられる供養塔があります。

四社家はいずれも、平安時代後半に成立したと考えられますが、遺構の保存状態が良く、当時の歴史や神官御家人の館の構造を知ることができます。

六．中世の宗教都市

このように、大隅正八幡宮、弥勒院跡、四社家は、一地方の宗教施設にもかかわらず、京都や鎌倉、琉球、中国、東南アジアと幅広い交流がありました。また、一宮を中心に形成、発展した中世の地割が良好な状態で残るなど、中世の宗教都市の形成事情や過程を知る上でも貴重で、全国的に見ても希少な史跡として高い評価を得ています。

（文責＝鈴）

大隅国建国1300年記念

■第7回史跡めぐり「きりしま歴史散歩」（健マ）

- 日時＝1月12日（日）午前8時～午後5時15分（受付＝午前7時40分から）
- 集合場所＝隼人庁舎前駐車場
- 内容＝宮田ヶ岡瓦窯跡（姶良市）、薩摩国分寺跡（薩摩川内市）などをバスで巡ります。
- 対象者＝小学生以上
- 定員＝30人程度（申込多数の場合は抽選）
- 参加料＝1,200円（姶良市歴史民俗資料館・川内資料館入館料を含む）
- 申込方法＝直接または電話で。
- 申込期間＝12月26日（木）

※飲み物などは各自ご準備ください。一部徒歩もあります。昼食は店にも寄りますが、持参されてもかまいません。

◎問・申＝文化振興課文化財グループ ☎(42)1119

※1社家…特定の神社に世襲的に奉仕する神職の家筋　※2勧請…本社の祭神を分霊して新たに造営した社で祀ること